

- ①石探祭車
 - ②神楽
 - ③子供獅子
 - ④津島山車の車切
 - ⑤一斉総車切
 - ⑥神守山車
 - ⑦からくり披露
- ※いずれも昨年の様子



10月1日(土)、2日(日)

尾張津島 秋まつり

津島の秋を引き立てる
お囃子の音

津島では、季節に彩られた固有の文化を象徴する多くの「まつり」が行われています。とりわけ、10月の第1日曜日とその前日の土曜日に行われる尾張津島秋まつりは、数多くの山車や石探祭車、神楽、子供獅子らが各地を練り回り、市内全域がまつり一色に染まります。

県下有数の山車の宝庫

市内に16輛ある山車は、尾張津島天王祭（日本を代表する山・鉾・屋台行事としてユネスコ無形文化遺産への登録を提案中※）が限られた地域の祭礼であったことから、自分たちの祭を持ちたいという地域が団結して新たな祭を創り上げ、各地に波及し、相互に影響し合う中で生まれ、発展してきました。

精巧なからくり人形の演技や山車を何回も曳き廻す車切は、からくり人形を操作する人形方や運行を担う梶方かじかたの熟練の妙技によって、繊細かつ豪快に披露され、山車祭を大いに盛り上げます。



▲車切は左の後輪を中心に行います。3トンにもなる山車を回すには、梶方同士のチームワークが重要です。



▲山車によってからくりも様々。人が糸や差し金を操作して動くもの、ぜんまい仕掛けて動くものがあります。津島駅前や津島神社で披露されます。

山車の2階でからくり人形を操る人形方。十数本から三十数本の操り糸を引き分けて、繊細な動きを表現します。▼



また、山車祭には、曲目を演奏し、祭を引き立てる囃子方の存在が不可欠です。笛や太鼓、鼓を用いて、祭囃子が奏でられます。

山車祭で演奏されるお囃子は、往路や復路、からくり披露や車切、神前に奉納する際等、場面によって全て曲目が異なります。そのため、秋まつりが近づくと、各地でお囃子の練習が行われ、笛や太鼓の音が地域に響き渡り、ムードを高めていきます。



※尾張津島天王祭の車楽舟行事だんじりぶねを含む山・鉾・屋台行事のユネスコ無形文化遺産代表一覧表への記載に係る今後の審査スケジュール
○評価機関による事前審査・勧告（10月下旬）
○政府間委員会による最終審査

（11月28日から12月2日までの間）



担い手の育成・お囃子体験会

8月28日(日)、観光交流センターで山車祭お囃子体験会が行われました。今年で4年目となる本事業は、囃子方の主役となる子どもたちが近年急激に減少していることから、お囃子を担う子どもたちを増やし、次代に継承していく体制を強化するために行われているものです。

参加した児童は、囃子方の指導者から締太鼓の打ち方を教わり、ゆっくりとした曲調のお囃子から順に体験していきます。最初は戸惑いながらも、すぐに慣れました。体験後、「笛や太鼓の音はまだ体の中で響いているみたい」という声や、「太鼓を打つ手の感触が忘れられない」といった感想も聞かれ、この中から一人でも多くの子どもたちが、新たなお囃子の担い手に育ってくればと期待が膨らむ機会となりました。

この体験会には、中学生の囃子方も駆けつけ、お囃子の見事な実演や、熱心に体験会をサポートしている姿が見られました。

祭が繋ぐ世代を超えた交流

「練習は厳しいけれど、多くの人に支えられており、これまで辛いと思ったことはありません。」

「祭当日、仲間とお囃子の演奏に集中しているところまで自分が祭の一部になったように感じる時があります。この瞬間が、お囃子をやってきて一番よかったと思えるときです。」指導を補助してくれた中学生が、こう話してくれました。お囃子に携わるきっかけとなったのは、家族や友達からの勧めが多いようです。

お囃子の練習は、最初は皆太鼓から始めます。腕を磨き、経験を積んで周りに認められると、大太鼓や笛

の練習をさせてもらえるようになるのです。

技術や想いを人から人へ。地域に根付いて伝承されてきた祭だからこそ、見る人たちの心をつかんで離さないのです。

問合 社会教育課生涯学習G

内線20801

